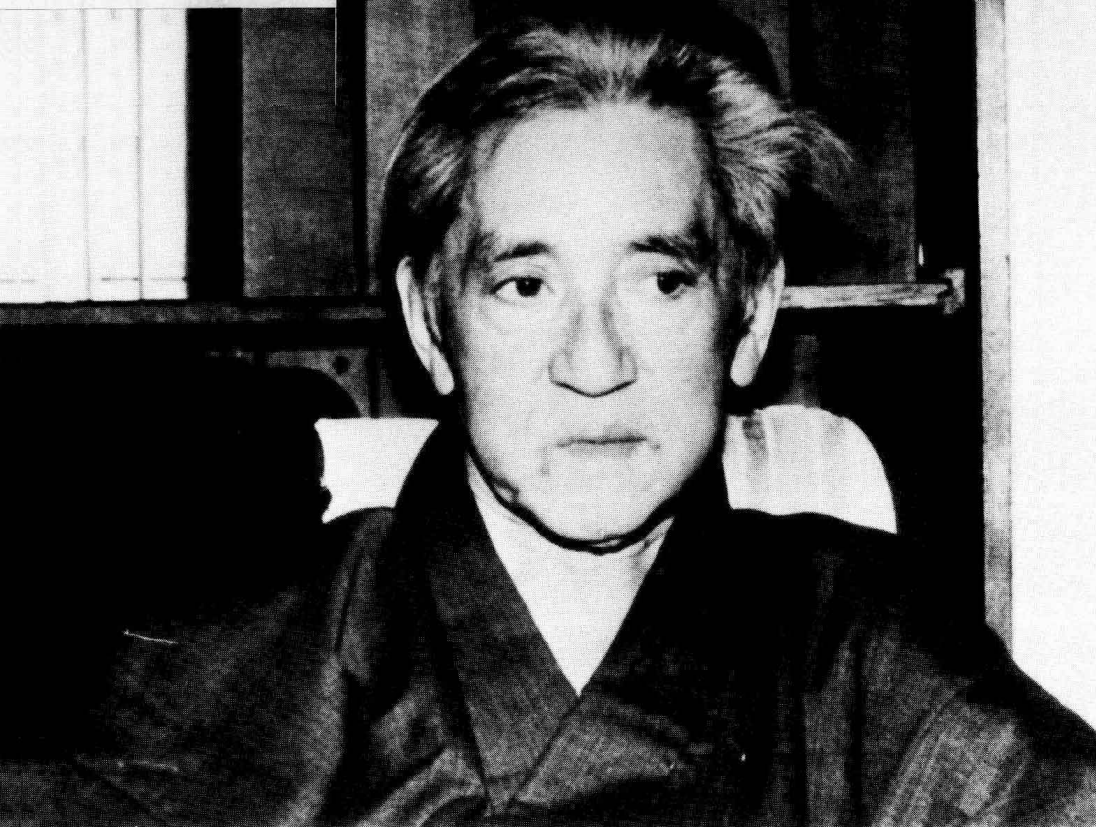


ビルマの豎琴

竹山道雄

THE
BURMESE
HARP



昭和五十八年十二月 鎌倉の自宅にて（撮影 藤沼正人）

ビルマの豎琴

一九八五年 六月二十一日 初版第一刷発行
一九八五年 八月二日 第四刷発行

定価 八八〇円

著者 竹山道雄

発行人 日枝久

発行所 株式会社フジテレビ出版

〒162 東京都新宿区市ヶ谷河田町7

発売 株式会社扶桑社

〒160 東京都新宿区西新宿2の7の1

TEL 03 (343) 2000

印刷・製本 大日本印刷株式会社

落丁本、乱丁本は、扶桑社販売部（書籍）宛にお送り下さい。
送料小社負担にてお取り替えます。

©竹山保子 1985 Printed in Japan

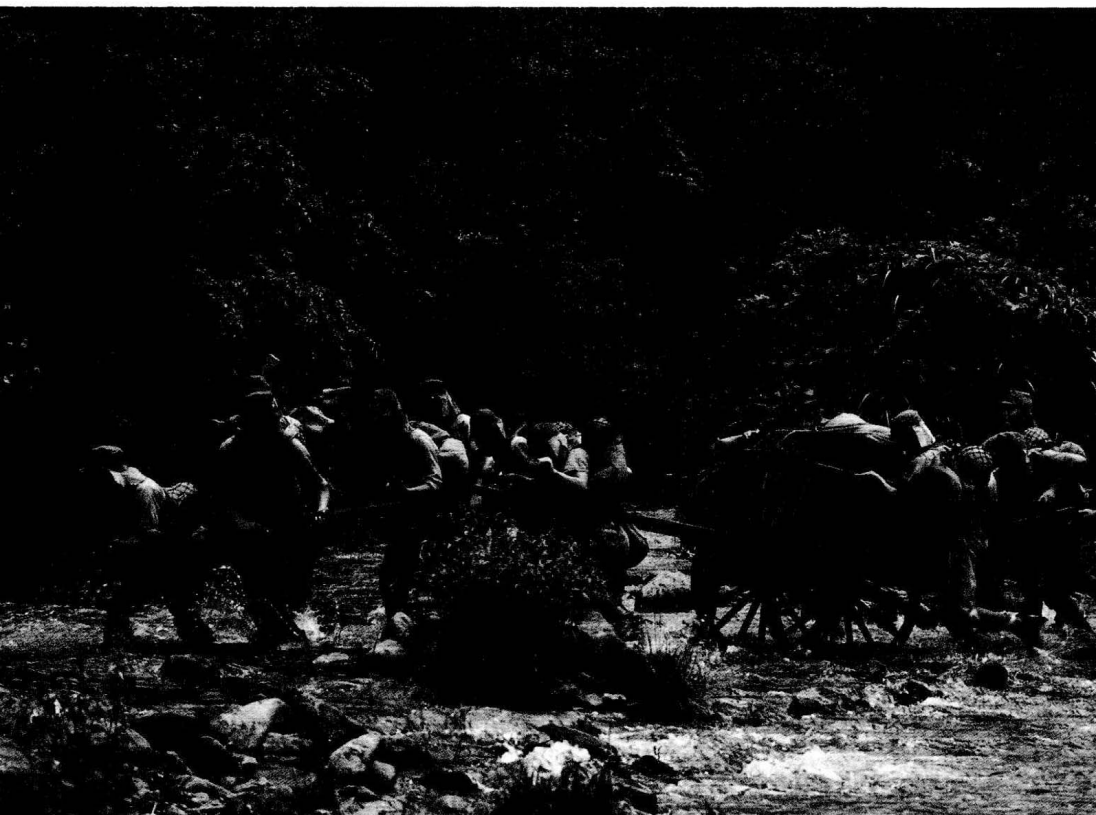
ISBN4-89353-045-3 C0095 ¥880E

ビルマの豎琴

竹山道雄











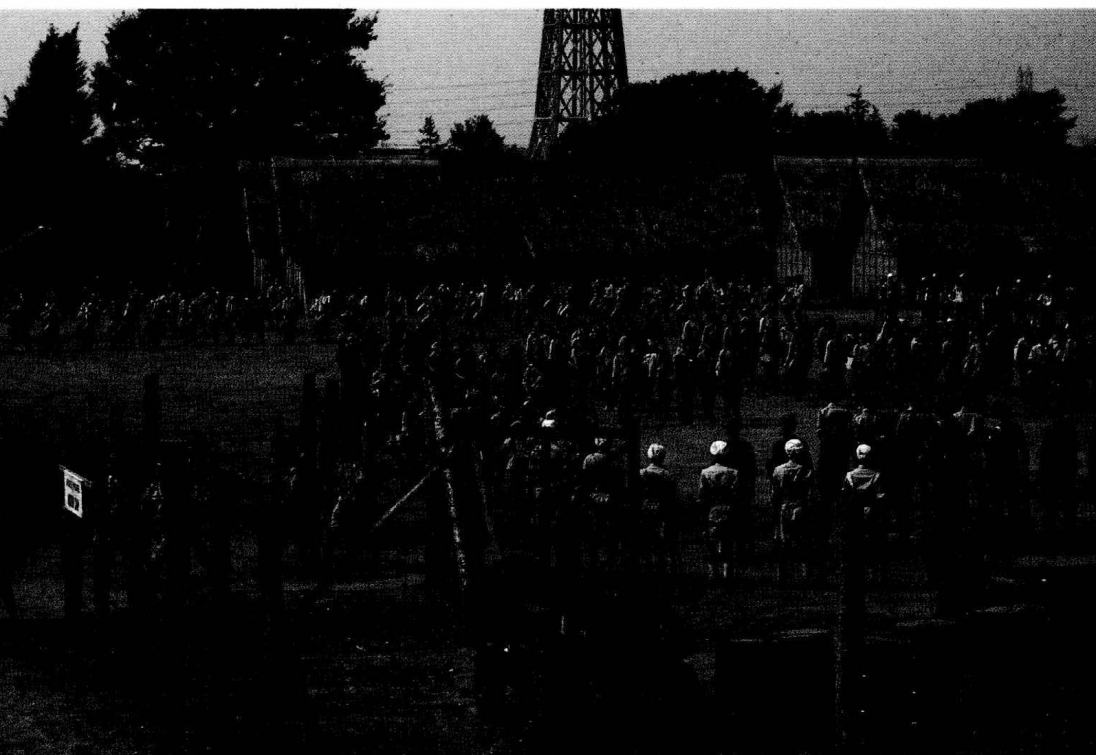
兵隊さんたちが大陸や南方から復員してかえってくるのを、見た人は多いと思います。みな疲れて、やせて、元氣もなくて、いかにも氣の毒な様子です。中には病人になって、蠟ろうのような顔色をして、担架かにかつがれている人もあります。

こうした兵隊さんたちの中で、大へん元氣よくかえってきた一隊がありました。みないつも合唱をしています。しかもそれが、むずかしい曲を二重唱や三重唱で上手じょうずにうたうのです。横須賀に上陸したとき、出迎えていた人々はおどろきました。そうしてたずねました。

「きみたちはそんなにうれしそうに歌をうたって、何を食べていたのだね」

べつに食物がちがつていた訳ではないのですが、この隊はビルマにいたあいだ、いつも歌の練習をしていたのです。隊長が音楽学校を出たばかりの若い音楽家で、兵隊たちに熱心に合唱をおしえたのです。それで、この隊は歌のおかげで苦しいときにも元氣がでるし、退屈なときにはまぎれるし、いつも友達同士の仲もよく、隊としての規律もたっていました。長い戦争の間には、こうしたことがどれほど助けになったか分りません。この隊が元氣よくかえってきて、出迎えの人々をおどろかせたのは、こうした訳だったのです。

この隊にいた一人の兵隊さんが、次のような話をしてくれました。



第一話　うたう部隊

一

ほんとうにわれわれはよく歌をうたいました。嬉しいときでも、つらいときでも、歌をうたいました。いつ戦闘がはじまるかもしれない、そして死ぬかも分らない、せめて生きているうちにこれだけは立派にしあげて、胸一杯にうたっておきたい——、そんな気がしていたからかもしれません。隊の者はみな心からうちこんで練習をしました。それも、なるべく深みのあるすぐれた歌をうたいたがりました。下らない流行歌などはいやがつて、誰も口にする者はありませんでした。それで、もちろんお百姓や労働者だった人が多いのですが、わが隊の合唱はずいぶん高尚なむずかしい曲までこなしていました。

いま思い出しても楽しかったのは、ある湖のほとりでした合唱です。

われわれは行軍をして、鬱蒼とした森の中の谷を下ってゆきました。すると行手に湖が見え、そのまわりに町が白い斑点のようにうかんできました。

その町はむかしビルマの王様の離宮のあったところでした。入江のほとりに白い壁の家が群がって、なかば水につかつて、影をうつしています。めずらしい形をした円屋根、鐘楼、尖塔などが空にそびえています。

この空の色が、熱帯ですからじつに綺麗なのです。蛋白石という宝石を御存じですか。ちょうどあのような白い色に光って、その中にさまざまな複雑な光がまじってキラキラとしているのです。こうした空に、あの円くうねった大理石の塔が立っているところは、まったく夢の中のようにでした。

われわれは三日ほどこの町に駐屯して毎日合唱しました。その曲は「春高樓の」だの「菜の花畠」のようなむかしなつかしいものから、賛美歌の節もあり、くだけたものでは「パリの屋根の下」、それからもつとむずかしいドイツやイタリアの名曲まであるという風でした。

ここの湖のほとりで、隊長はうれしそうに指揮棒をふりました。われわれも胸の底から声をだして、自分たちの合唱にききいりながら、この絵のような湖にむかつて歌をうたいました。

それから、わが隊のお得意の「はにゆうの宿」を、三重唱四重唱にしてくりかえして練習しました。「はにゆうの宿」——この故郷の家をおもう歌は、いつきいても心にしみ入るような曲です。

われわれはうたいながら、この目の前の景色を故郷の家の人たちに見せてやりたい、この歌の声をきかせてやりたい、と思いました。

合唱が終ると、隊長はいいました。

「よし、きょうはこれだけにする。あしたはまたこの時間に、今度はあたらしい歌を練習する。分れ」
そして、隊長は一人の兵隊をよびました。

「おい、水島、伴奏はできたかね」

水島とよばれたのは上等兵です。中背のやせた人で、ひきしまった体は日にやけてほとんど真っ黒

ですが、大きなきれいに澄んだ目が凹んでいます。

この人はこの隊に入ってから始めて音楽を知ったのですが、元来天分があったとみえて、みるみるうちに非常な上達をしました。自分でも夢中で音楽にこつて、寝てもさめても歌のことを考えていました。ことに、自分で楽器をこしらえて合唱の伴奏をするのですが、それがすばらしい腕前で、さまざまの曲にさまざまの伴奏を立ちどころに作りました。

いったいそんなところに行っていた軍隊に、楽器なんかがあったのか、とおっしゃるのですか。ありましたとも、いろいろの種類のじつにめずらしい楽器がありました。

兵隊たちのもっていた楽器をあつめたら、面白い博物館ができると思いますね。兵隊はどこに行っても、暇ができると、きつと誰かが楽器をつくります。中には専門家もいるのですから、不自由な材料をつかって、びっくりするほど立派なものを作りだします。吹奏楽器は、蘆や竹をきって穴をあけた簡単なものから、こわれた機械の部分品をとりつけた本式の喇叭まであります。打楽器なら、木の杵に犬か猫の皮をはった鼓から、ドラム罐に何かの皮をはったのまで見たことがあります。虎の皮だといっていました、どうでしょうかね。とにかくすごい音がして、よく響いて、その隊では自慢にしていたものです。

隊によつては、どうして作ったものか、ヴァイオリンやギターまで持っているものまでありました。われわれの隊で一番よく使われていたのは、一種の堅琴でした。

これはビルマ人がひく堅琴をまねて作ったものです。この国の太い竹を共鳴体の胴にしてあります。それに、やはり竹を曲げてすけて、絃をはります。絃は銅、鉄、またはアルミカジュラルミンの針金です。低い音をだすのは革紐です。こうした絃をはって、音程を合わせると、それもずいぶん苦心の末ですが、めずらしい堅琴ができました。





水島上等兵はこの豎琴の名人でした。いろいろに工夫して曲をつくって弾いていました。彼がこの豎琴をひくと、琵琶とピアノのあいだのような音がいくつもからみあって、風の中にただよいます。しかし、日にやけて戦鬨帽をかぶった兵隊がこうしたやさしい楽器を抱いて、夢中になって弾いているのですから、はじめての人が見たら、きっとおかしくて笑いだしたでしょう。

いま、水島上等兵は隊長にいわれて、その豎琴で自作の「はにゅうの宿」の伴奏をひきました。伴奏というよりも、ほとんど独奏曲といつていいくらい、手のこんだ面白いものでした。

兵隊たちはまわりに集まって、腕をくみ、目をつむって、この豎琴をききました。

あたりの空気は匂いがよく、しずかで、とろりとしています。豎琴の音は湖をわたって、とおくの森の下あたりの水の面に揺します。ここの森は大きなチークの木です。そこに猿が跳ねているのも見えますし、またさまざまな鳥がしきりに鳴きかわしているのもきこえます。

そのとき、とつぜん、どこからか一羽の孔雀が舞いだしてきました。しばらく兵隊のいる前をゆっくりと歩いていましたが、また舞いたちました。そうして、静かな大気の中にはたと翼の音をたてて、湖の面に影をおとしながら飛んでゆきました。

これはほんとうに楽しい思い出です。

一一

しかし、そのうちに戦局が次第にわるくなり、ついには誰の目にもとうてい見込みがなくなりました。そして、われわれは見知らない国を、山から山と逃げてあるくことになりました。何とかして国境の山脈を越えて、東のシヤムに入ってしまったおうとしていたのです。あるときは、わざと峻しい間道